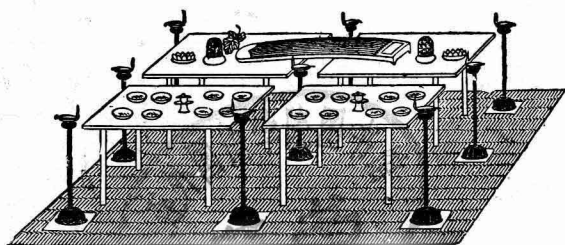


評註 建禮門院右京大夫集全釋

關西學院大學教授

本位田重美著



武蔵野書院刊

昭和二十五年四月二十日 印刷
昭和二十五年四月廿五日 發行
昭和三十四年二月十日 訂正七版發行

評註 建礼門院右京太夫全釈

定價 三〇〇円

編者 本位 田重美

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
發行者 前田 武

東京都文京区白山御殿町一八
印刷者 柿崎 忠一郎

東京都千代田区神田錦町三ノ十一

發行所 合名 武蔵野書院
会社

電話東京(29)四八五九番
振替口座東京六七一四六番

印刷 文社

は し き

私が建禮門院右京大夫に興味をひかれ始めたのは大學在學中のことであつた。當時、地方のある小さな歌誌に右京大夫集の注釈を二三回載せてもらつたりしたこともある。ただいろいろな事情で専心右京大夫の研究に没頭することはできなかったけれども、大學卒業後も、興味は相変らず持ち續けて、機会のあるたびに異本の校合をしたり、傳記の考証や、本文の注釈的研究を續けたりしてきた。太平洋戦争が起つて間もない頃、たまたま當時日本女子大に在學中の阿部勝子さんといつしよに右京大夫を読む機会を得、その頃から注釈を書いてみたい氣持がだんだん強くなつてきた。

昭和二十一年の初夏、私は三年にわたる大陸生活からやうやく解放されて故國の土を踏んだ。誰もが經驗する、あの復員後の虚脱状態から脱却する手段として、私は、一應材料の揃つてゐる右京大夫集の注釈をまとめることを思ひついた。休み休みぼつぼつとする仕事ではあつたけれど、二十年の四月には六百枚に及ぶ原稿がともかくも完成した。

その中には十五年に及ぶ研究生生活のさまざまな思ひ出が隠されてゐるのである。私はできることならこれを出版したいと思つた。しかし、當時の困難な出版事情のもとにあつては、あまり人に知られてゐない右京大夫集の、しかも六百枚といふ大部の注釈を出版してくれるところなどある筈もなかつた。恩師、先輩、友人などのさまざまな御盡力にも拘らず、原稿は結局埃に埋もれたまま積

んでおかれることとなった。

しかるに、たまたまこのことが武蔵野書院の前田信氏の知るところとなり、氏の好意により、この半ばあきらめてゐた原稿が「國文評註叢書」の一篇として世に出ることとなった。が、叢書的一篇である以上、これだけをさう大部なものにすることはできない。私は、一つには前田氏の御好意に報いるため、できるだけ原稿を削らうと思った。まづ諸本の異同に關する註記は、底本（類從本）を改めた場合だとか、その他必要と思はれる最少限度のものを残し、他は抹消した。これは佐佐木信綱博士の富山房文庫本にかなり詳しく異同が註せられてをり、これに譲ればよいと思ったのである。次に、解説としては傳記の研究だけを掲げることにした。傳本や研究論文に關しては、富倉徳次郎氏の「右京大夫小侍從」（三省堂刊）に詳しい解説が見えるし、また私としても、別に武蔵野書院から刊行した教科書版の右京大夫集に、一應の解説はしておいたからである。かうしてあれこれと頁数の削減につとめたけれど、それでもかなり大部なものとして残つてしまった。人が見れば、まだまだ言はでることが多いかもしれないが、それは右京大夫集に対する私のかぎりない愛着がさせるわざで、読者諸彦にも前田氏にも相済まないことながら、こればかりは諒としていただくほかはない。

昭和二十五年一月

著者しるす

目 次

は し が き 一

建禮門院右京大夫傳の研究 五

建禮門院右京大夫集上 八三

建禮門院右京大夫集下 二三五

一世尊寺伊行

建禮門院右京大夫は、かの行成の裔であり能書の家として有名な世尊寺家に生まれた。今、尊卑分脈からその家系を抄出すると左の如くなつてゐる。

行成 — 行經 — 伊房

少將從四位上
右京大夫 能書

一切經一筆書寫人
從四位下
宮内權大市 能書

定實
母章女 宰大貳高階成
元永二——出家

定信
母權中納言基綱女

作夜鶴抄
從五位上
宮内權少市

能書

歌人 正四位下
中務權少市

能書

修理大夫
從三位

能書

伊行
母嘉祿三正三卒

行能
母法橋增宗女
延應二十一二十六
出六十一

行家

山改定伊

尊圓

母

建禮門院女房右京大夫

女子

母々霧 大神基政女

大夫局

女子

(イナシ)

女子

忠能卿妻

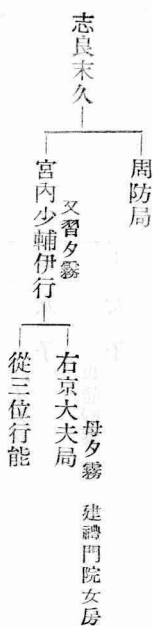
女子

まづ父の伊行に就いて述べることにする。從五位上藤原伊行は、大體が能書の血脈を享けてゐる上に、特に書道にすぐれてゐたことは、二條、六條兩帝の悠紀主基の御屏風を書き奉つたのを見ても明かであると思ふ。その著はすところの夜鶴庭訓抄二卷は、箏と書道についてその子女のために書き残したものと傳へられてゐる。右京大夫がかうした景園氣の中に生育して、書道に堪能であつたらうことは充分に察せられるところである。家集に、

建仁三年のとし霜月の二十日あまりいくかの日やらむ、五條三位俊成入道の九十にみつときかせ
おはしまして、院より賀たまはするに、おくりものゝ法服の装束の袈裟に歌をかけるべしとて、
師光入道の女、宮内卿殿に歌はめされて、紫の糸にて、院のおほせごとにて、おきてまゐらせた

りし。云々とあるが、この時袈裟の歌を宮内卿に、杖の歌を有家朝臣におほせつけられたことは、院が特に重代の家柄をおぼしめされての結果であると源家長日記は傳へてゐる。従つて、右京大夫が歌をおき奉つたのも、日記にはそれと傳へてはゐないけれども、やはり重代の家柄を思し召されての上であることは勿論であつて、彼女の能筆を示してゐると同時に、世尊寺の家に生まれて父祖の名にそむかぬ譽であつた。

伊行はまた等に堪能であつた。そのことは、その著夜鶴庭訓抄が入木道と共に等に就いても述べられてゐることによつても明かであるが、又秦等相承血脈によれば



とあつて、伊行は志良末久及び夕霧より等の血脈を享けてゐるのである。右京大夫が父伊行の教を受けて等にも優れてゐたことは、相承血脈の示す通りであるが、このことに就いては後に述べる。

更に伊行は文藝の方面においてもすぐれた才能を示してをり、特に學究的な業績として源氏物語の最初の註釋書たる源氏物語釋を著はしてゐることは源氏研究史上不朽の地歩を占めるものであ

る。又伊行は伊勢物語の校勘にも預つたと見えて、定家流布本の奥書に

又或説後人以_ニ狩使事_ニ改爲_ニ此草子端_一。爲_レ叶_ニ伊勢物語之道理_一也。件本狼藉奇恠者也。伊行所爲也。不_レ用_レ之。

と記されてゐるが、これは狩使の段を冒頭に置いた本を伊行の改竄本として定家が批難してゐるのであつて、説の當否は暫く置き、伊行の國文學研究史上に占める位置を察するに足るものであらう。右京大夫がこの方面においても父の大きな影響をうけてゐることは、家集に、源氏物語紅葉賀をひいたり、同じく幻の巻の歌を引用したりしてゐるのを見ても察せられよう。なほこの他にも「たのむとしはなけれど、さすがにむさしあぶみとかやにてすぐるに」云々と伊勢物語の「武藏鐙さすがにかけたたのむには訪はぬもつらしとふもうるさし」の歌を引用したり、また萬葉集、古今集、拾遺集などから引いたところがあつたりする點から考へると、彼女は幼い頃から古い物語や歌集に親しんで來たのであらう。勿論これは當時の上流の家庭にあつては當然のことであつたかも知れぬが、やはり源氏最初の註釋をほどこす程の學識のあつた父の影響を見逃す譯にはゆかない。家集における彼女の文章が優婉で非常に巧みであつたのも、さうした幼時からの素養に基くものであると思はれる。

伊行の和歌の技倆については、伊勢物語闕疑抄に前掲の定家の奥書を釋して、

伊行は世尊寺の先祖なり。建禮門院右京大夫ノ父なり。一切經書たる者にて、能書すぐれ、夜鶴

抄などを作し、又歌道も隨分名を稱せられたるものなり。

云々と見えてゐるが、その作品は續詞花集に一首見えるほかは、仁安二年太皇太后宮亮平經盛朝臣家歌合に五首の作品が傳へられてゐるばかりである。併しながら、右京大夫の兄の伊經、尊圓が千載、新勅撰の歌人であり、伊經の子行能は新古今以下に四十七首採られてゐる歌人であることを考へ合はせると、新勅撰集以下に二十二首採録せられてゐる右京大夫の詠歌の技倆が、家系の素質と幼時からの環境に負ふところが多いことを否定出来ないであらう。

二 夕 霧

「右京大夫の母が大神基政の女であることは、尊卑分脈、扶桑拾葉集系圖、その他諸書の一致する處である。大神家は笛の家柄で代々雅樂寮に仕へた。絲竹口傳に「八幡の樂人大神基政」云々とあるのによれば、家も石清水八幡宮あたりにあつたのであらうか。今その家系を大神系圖から抄出すと、

爲遠——(懷竹抄、作惟季)
是季——基政——(懷竹抄、作元賢)
大神氏。始右舞人。宮弟也。
基賢 内舍人

となつてゐる。基政の父惟季は懷竹抄に、

「大旨ハ如ニ圓憲得業」。始ハ雖レ習ニ小部正近。其吹様ニハ更不レ似。後ニハ圓憲ノ弟子成シ故ニ

ヤ。聞タガフルホドニゾ似タリケレ

とあるから、かなりの笛の名手であつたのであらう。また基政は同書に、

耳ゾ少シ聞ザリケレドモ。心操管絃ニシミカヘリタルモノニテ。萬事ヲ心エ目出吹ケリ。師説。

度歟

有レ限樂ハ云ニ不及、辻笛ニ面白キ手差吹ヲ聞テハ。其様ヲ吹ナントシテコソ。名譽ノ笛吹ニハ成テ侍ケレ。

とあり、また古事談第六には、吉備津の宮の託宣によつて社前で笛を吹いたといふ逸話が傳へられてゐる。更に樂所補任長承元年の條には、基政が從五位下に叙せられたことが見えてゐて、「五位新叙近來樂人初例也」と註が施してある。なほこの外に彼が龍鳴抄といふ雅樂の書を著はしてゐることなどを考へ合はせると、彼が當時世に聞えた笛の名手であつたことが察せられるであらう。特に古事談、續古事談、十訓抄、古今著聞集、教訓抄等に傳へられる夥しい逸話の數は、彼の音樂に關する技倆見識を證して餘りあるものである。なほ樂所補任によれば、基政は永久元年雅樂屬、大治三年雅樂允、長承二年散位となり、保延四年六十で卒してゐる。

さて右京大夫の母であるが、扶桑拾葉集作者系圖に

伊行——女

右京大夫建禮門院侍女 歌人
筆上手 號ニタ霧尼——母大神基政女

と見えてゐるので、夕霧といふのは右京大夫自身の後の名であるやうに傳へられてゐたのである

が、それは勿論誤りであつて、夕霧が基政の女であることは、大家笛血脈に

基政 左近衛將監。大神基政也。是女有夕霧尼者。師長公時人也。

とあり、また近衛家基の殘夜抄にも

ゆふぎりとしてことひきありき。樂人基政が女。それがすゑの弟子どもの中より。陪臚をはじめはたゞ拍子にひき。なか拍子とて。又たゞ拍子ながらはやくひき。はやひきとて。てをそぎて扶南などのやうにひくことあり。これらはいづれも物ぐるはしき實説もなき事也。

とあるのを見ても明かであらう。なほこの夕霧が多く弟子を持つほどの筆弾きであつたことは、殘夜抄を見てもわかるのであるが、このほかにも絲竹口傳に、

夕霧ト云ハ八幡ノ樂人大神基政ガ女ナリ。此夕霧ニ父ガ笛ノ骨ヲ以テ探リテ私ニオシヘケリ。師長公ヘ具シテ參リ。コノ女ニ筆ヲ探リテ訓ケルアイダ。キコシメサレヨト云ケレバ聞食シケリ。

笛ノ詞ナル故ニ呼吸吹タリトホメサセ給ケリ。ウルハシキ筆ノ手ニケハナクコマカニ面白シ。サリナガラ正流ヲソムケリ。世ニスグレタル遊君白拍子等ノヒケル様コレナリ。シラヌ耳ニハ面白シ。知ル耳ニハアラスモノ也。撥ヤウハ小爪ノモトマデ皆カケリ。今ハ絶タルモノ也。

と出てゐる。これらによつて考ふるに、夕霧は當時筆にかけては世に聞えた名手であつたのであらう。絲竹口傳によれば、基政が笛の要領を箏に應用して夕霧に教へたといふことになつてゐるが、これは必ずしもさうでなかつたと思はれる。といふのは秦箏相承血脈によれば、

右大臣雅定女房
大進大神基政女

我駒——前因幡守教高——夕霧

又習「我駒」受「俊賀説」
或志良末久弟子云々

と、教高、我駒、俊賀その他志良末久の教をも受けたらしいからである。従つて「正流ヲソムケリ」云々といふ絲竹口傳の説もどうであらうか。併し所謂正統派のものとは多少變つてゐたであらうことは、前記の殘夜抄や絲竹口傳のやうな、多少傳説化された話が傳はつてゐたり、或はその師についても色々の説が行はれてゐたらしいのを見ても想像出來よう。

右京大夫の父の伊行が箏に堪能であり、秦箏相承血脈によれば、右京大夫がこの父の伊行から箏の傳授を受けてゐることは前述した通りであるが、當時斯道に不世出の天才と謳はれた外祖父基政、母夕霧といふ母系から、右京大夫が音楽に關してすぐれた天分を享けついでであらうといふことは疑ふ餘地もないことであつた。家集に

その頃ちりつもりたることを、いかで多くの月日へにけりと見るにもあはれて、宮にて常は近く侍ふ人々の笛にあはせなど遊びしこといみじく戀し。

をりをりのその笛竹も音たえてすさびしことのゆくへ知られずとあり、また

頭中將さねむね、常に中宮の御方へまゐりて、琵琶ひき歌うたひ遊びて、時々ことひけな
どいはれしを、ことさましにこそとのみ申してすぎしに、あるをり文のやうにてたゞかく
書いておこせたり。

松風のひゞきもそへぬひとりごとはさのみつれなき音をやつくさむ

かへし

よのつねの松風ならばいかばかりあかぬしらべに音をかはさまし
とあるのを見ても、右京大夫の音楽の素養の深さを察せしむるに足るのであるが、殊に後者におい
ては、當時琵琶の第一流の名手であつた實宗が右京大夫に合奏を望んでゐるのである。「さのみつ
れなき音をやつくさむ」といふ實宗の言葉に儀禮的な要素が多分に含まれてゐることは見逃せない
にしても、少くとも實宗が右京大夫の箏の技倆を相當高く評價してゐたことは動かし難い事實であ
らう。ちなみに實宗は權大納言公通の男、琵琶血脈に

妙音院太政大臣師長公——實宗卿

と見えてゐるので、その技倆の程が察せられるのであるが、彼が若くして世にすぐれた名手であつ
たことは、六條天皇の仁安二年法住寺殿の朝覲行幸の御遊に弱冠二十三歳をもつて琵琶を弾じてゐ
るのを見れば理解出来る。即ち御遊抄に

比巴。右中將實宗朝臣。權大師長。